

手間はかかるけど 何より安全第一

石塚キクエさん
(新田戸)



石塚さんはヤーコン、キクイモ、アピオスという3種類の新しい健康野菜を、栽培しています。「より安全で安心なものと考えて、ちばエコ農産物の認証を受け、自覚を持つことから始めました」

肥料は牛ふんと、野菜くすなどを善玉菌で発酵させたE堆肥。化学肥料は完全不使用です。「これらの野菜は無農薬で作れ、収穫も重労働ではなく、身障のある私でも気軽にできます。何より体にいい野菜だから普及させて、皆さんに食べていただきたいですね」

石塚さんの家では、米でもちばエコ農産物の認証を受け、やはりE堆肥を使い、農薬や化学肥料は基準値の半以下に抑えて栽培。ミミズやイナゴが年々増え、昔の田んぼに戻りつつあるそうです。

「エコ農法は手間もかかりますが、何より安全が一番。子供たちにも安心できるものを食べさせたいですし、私自身にとっても、楽しみながら良いものを作っているという自負が、心身の健康の源になっている気がします」

エコ農業の輪を 地域にも

沢田 昇さん
(木間ヶ瀬)



沢田さんは米でちばエコを取得し、自然循環型の農業に取り組んでいます。「肥料の高騰もきっかけの一つ。化学肥料を少しでも減らせて、食の安全・安心のためにもなるならと始めました」

堆肥は、食品加工工場から出る野菜の残りを再利用して作ったもの。代掻き前の水田に入れ、化学肥料は田植えのとき、苗の生育を促すためにごく微量使っただけ。それでも収穫量が目立って減るようなことはないそうです。

「数年後には堆肥の効果で土が活性化してくるはず。そうしたら農薬と化学肥料は一切使わずに、特別栽培米の生産をしたいと思います」

設立した「農事組合法人きまがせ」でも、米でちばエコを申請。牛ふん堆肥を使い、米のほか麦や大豆も減農薬・減化学肥料で栽培しています。

また、「JA木間ヶ瀬 青壮年部」にも所属し、なるべく農薬を使わずに作付けしたサツマイモ畑と水田を、幼稚園児のいも掘り体験や小学生の田植え体験に提供するなど、環境に配慮した農業を通じて地域貢献をしています。

入にいち早く取り組み、平成11年度に国からの補助を受け、船形地区に堆肥センターを設置しました。家庭などから出た落ち葉や刈り草、

剪定枝などの未利用資源は、従来はごみとして焼却処分されていたが、同センターでリサイクルして堆肥をつくり、農家に利用し



出来上がった剪定枝などの堆肥

リサイクルへの意識も向上

堆肥センターは平成12年4月から運営を始めました。落ち葉、刈り草と剪定枝とでは、堆肥になるまでの工程や期間も異なるため、それぞれに破碎処理し、別々のストックヤードで熟成を進めています。

有機肥料は、土の中の微生物によりゆっくりと分解されるため、化学肥料よりも少ない分量で、効果が長く続き、土壌改善の効果もあります。微生物が病原菌の活動を妨げ、土がふかふかになって根がよく伸び、健康な作物が育つのです。

でもらえば、ごみが資源として生まれ変わるとともに、化学肥料から有機肥料への切り替えも進むという一石二鳥の効果が期待できます。

地域に広まるエコ農業

特に、剪定枝だけを原料にした堆肥づくりは、全国でも珍しく、県の東葛飾農林振興センターによると、土の固さなどの改善に効果があると考えられるそうです。

堆肥センターに搬入される落ち葉や刈り草、剪定枝の量は年々増えており、また、市では戸別回収も積極的に行っていることから、利用件数も増え、市民の間でも「ごみからリサイクルへ」という意識が高まってきています。

環境に配慮しつつ農地の生産力を維持・増進するような農業への注目が集まってきたことから、国や県はエコファーマー、ちばエコといった制度もつくり、「土づくり」「化学肥料低減」「化学農薬低減」に一体的に取り組む農業者を支援しています。

市が堆肥センターで生産した堆肥も、平成13年8月から、まずはエコファーマーへ試験的に配布しました。

平成14年3月からは、一般農家にも広く配布し、市内で有機堆肥を利用いただいており、各地でエコ農業に対する関心が高まっています。